
テンプレで戦闘生物に成っちゃった

林音ヨウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレで戦闘生物に成っちゃった

【Nコード】

N8443T

【作者名】

林音ヨウ

【あらすじ】

神サマの諸事情により死んだ一人の青年。彼はテンプレ的に能力を貰い異世界に旅立つこととなった。だが世界も神も無情である。行き先は選べず、貰える能力も一つだけ、更にはなんと「自称・究極の戦闘生物」の力だ！？そんなこんな主人公が織成すクリーチャーライフ、その行く先は何処に向かっているのやら……。

*注意*本作は処女作となりますので粗が目立つと思われまます。更に原作ブレイクやアンチ、オリジナル設定や独自解釈などを含みま

すので「勘弁ならん」と言う方は「遠慮願います」。

はじめに・注意事項&お知らせ(8/31 NEW)

【当作品を読むにあたっての注意】

- ・この作品は「魔法先生ネギま！」を基点とした二次小説です。
- ・「強殖装甲ガイバー」の成分は基本的に主人公のみです。
- ・主人公は元ネタがチートなのでチートな存在になります。
- ・更新は亀の歩みで不適です。
- ・本文の誤字や脱字、文法や表現が酷いかもしれません。
- ・オリジナル設定および独自解釈が多いです。
- ・原作ブレイクが発生します。
- ・アンチ成分が混入されるかもしれません。
- ・作者は中二病であり、カワカミンに感染中です。
- ・この作品は作者の処女作です。自重はしません。

以上のことで一つでも「勘弁ならん」と言う方はブラウザを閉じ
ることをお勧めします。

【お知らせ】

2011/8/31 第零捕食から第肆捕食まで加筆・修正。

第零捕食へプロローグ

気が付けば見知らぬ場所にいた。

無闇矢鱈と広く辺り一面白に塗り固められた奇妙な空間。

見渡す限り何もなく、終始沈黙に徹する景観は酷く目に痛い。

肌に触れる空気は無機質でありながらどこか暗鬱としており、まるで隔離された病室を思わせた。

どうしてオレは斯様な所に居るのだろうか？

確かいつものように酒瓶片手に柿ピー摘みながら晩酌をチビチビと楽しんでからMy布団へダイブして熟睡した筈。

いや、そもそも此処は――

「此処は何処だ？」

『此処は汝等人間が彼の世と称する死者の国だ』

ほうほう、死者の国ねえ。

イメージとしてジメジメと暗く陰鬱で殺伐とした場所を思い描いてたが、この殺風景さはどちらか言えば天国とか神界とかの方が似合っているのではないかな。

.....あれ？

今現在、此の場所にはオレしか居ない筈だよな。さっき周囲を隈無く確認したから間違いないはずだ。

だったら、だったら何で答えが返ってくるんだ？

恐る恐る声の聞こえた方へ振り向くと.....

『おお、漸く気付いたか』

非常にムサク暑苦しいオッサンが、どういう訳か天地魔闘の構えを取っていた。

「あ.....どちら様でしょうか」

『うむ、よくぞ聞いてくれた。』

我が輩の名は悪路王。あくろおう一応閻魔なんぞやっているが気に負うことはないぞ、堅苦しいのは嫌いなのでな。フレンドリーに「アツちゃん」とか「エツちゃん」とか好きに呼ぶが良い」
「はあ」

なんなんだろうか、この人は。脳味噌沸いてんじやなかるうか。
「うーか外見が無茶苦茶ありえねえ。」

背丈がすでに三メートルは軽く越えており、伸びる四肢は丸太の如く、指の一本一本が女性の腕のよう。インドの僧侶にボディビルダーも真つ青な筋肉を盛り込んだ褐色の巨体は、見る者へ締め付けられる程の威圧感と押し潰されると錯覚を覚える圧迫感を与える。つるりとした頭部の側面には何やら入れ墨が彫られているらしく、黒い紋様が見え隠れしており、彫りが深く鋭つい顔と相まって滅茶苦茶怖い。

失礼なことだとは重々承知しているが、これを同じ人類だと信じたくはない。

そもそも身に纏った法衣をレオタードの如く隆々とした筋肉に張り付けている生物なんぞ人間では無いだろう。少なくともオレの常識ではそうだ。

様々な要因が相俟って恐怖心がガンガンと警鐘を鳴らしているから今直ぐにでも逃げ出したい気持ちに駆られる。

「ふう〜む、我が輩を前にして逃げ出さぬか。中々に肝が据わった奴よ。」

それはそうと分からぬ事が多いであろうから、懇切丁寧に説明してしんぜよう」

「えっと、あっと、その、ありがとございます」
外見はアレだが、結構良い人のようだ。

「まず最初に言っておくが汝は既に死んでおるぞ」
へ〜、そ〜なのか〜。

「………はいい!?!」

「何言ってるの?オレはピンシヤンしてんだぜ。冗談にしては質が

悪いとしか言いようがないんだが」

『信じられんのも無理はない。だが証拠に、ほれ。己の体を見よ』

「体あ？体に異常なんて……何じゃこりゃあ
あああああ！？」

手が透けてるう！？

足なんて踝から先が消えてるし！！

それに気が付かなかったけど、何か地面より十数センチは浮いてるんですが！

非現実的な光景を目の当たりにしたせいでオレはパニック状態に陥った。

人間とは己が理解できないものに対して忌避感を抱くもので、更にそれが自身の身に起こってしまった場合、平常時と同じ思考はま
ず不可能だろう。

何故？どうして？

まるで出口の見えない迷路をさ迷うが如く、意味を成さない疑問符がグルグルと頭の中をループする。

しばしの間を置いて僅かばかり冷静さを取り戻すと、ぱっと非常に現実的な考えが思い浮かぶ。即ち「これは手品のトリックだ」と。

『悪いが高度なCGを駆使しているでもワイヤーで吊っているでもないぞ。そもそも我ら以外何も存在していないこの場所で、そんな大それた仕掛けを隠し通すことなど不可能だろうよ』

こちらの心を読んだかのようなタイミングで告げられた言葉。ただ事実を述べたそれは決るようにオレが抱いた希望を打ち砕く。

縋るように周囲を見渡すも依然として沈黙を貫く広大な白が有るだけ。

信じたくなかった。

認めたくなかった。

だが、否定する材料は剥ぎ取られ無慈悲な事実のみが残された。もはや受け入れるしかないだろう。

この残酷な現実を。

毎度のことながら世界は非常だ。

祈っても願いは中々叶えてくれないし、要らないものをダース単位で放つてよこす。

まったくもって、天に座します我らが神には感謝を込めてダブルリアットを贈りたいものだ。

『どうやら理解できたようだな』

「納得はしてないがな」

『別に構わん。我が輩は気にせん。』

とりあえず”死”を受け入れたことで最初に言った、此処は彼の世で我が輩が閻魔であることも事実であると分かったと思うので話を続けよう』

「あつ、その前にオレの死因は？」

『それも含めて説明してやるから急かすな。意外と長くなるから質問等は後にして、まずは最後まで聞くことをお勧めするぞ』

勿体ぶらずに教えるよ、と思ったが気分を害して立ち去れたりしては不味い。ちよつともやもや感を抱えながら黙して聞く事にした。
……出来ればさっさと終わって欲しいな

閻魔説明中……

体感で三時間後。

長々とした言葉の波からようやく解放されると、知らず溜息が漏れた。

つーか、説明するって言うときながら大半が仕事の愚痴だとか有り得ねえ。しかも要所要所で仮面ライダーとかプリキュアのポーズ

とかとるのは止めて欲しい。似てる似てない以前にマジでキメエんだけど。

兎にも角にも要点だけを纏めると以下の通り。

その壱：この世界は輪廻転生が推奨されており、閻魔を初めとする神サマ達に管理・運営している。(コレ基礎知識ね)

その弐：元々オレは八歳で死ぬ予定だったが、アツちゃんの手違いで寿命が十倍の八十歳まで延びた。(ミスに気付いたけど放置したらしい)

その参：先日アツちゃんの部下の生真面目な死神ちゃんがミスを発見。不正を正すためにオレをサクツと抹殺。(DEATHなノートに名前を書いて心臓麻痺だつてさ)

その四：魂が輪廻転生の輪に戻つてめでたしめでたし……とはならず、二回も因果律を干渉されたせいで世界より弾き出される。(ハブられたとも言つ)

その伍：ちよびつと罪悪感を感じたアツちゃんが他の神サマと交渉して、別の世界 - 異世界へ転生出来るよう段取りを組んだらしい。(アツちゃんサンキュ！)

その陸：説明と準備の為にアツちゃん直々にオレの前に光臨。(今ココ)

つてな事らしい。

これ話すのに一時間超えるなんて信じらんね。普通だつたら五分も掛からん内容なのになあ。

『いやはや悪かつたな』

「悪いと思つてるならちゃんと土下座しろ」

エクソシスト式ブリッジで謝られてもふざけてるとしか思えない。そもそも床に額を押し付ければ良いって訳ではないのだ。やるならば境ホラの守銭奴を見習えつての。

『謝つてるだけでも評価して欲しいぞ。他の神だと手紙一枚とか電波とかで終わらす者が殆ど、最悪ノーアクションなんてのもザラだ。それはそうと、転生先の異世界なんだが安心しろ。表側は今まで

過ごした世界と殆ど変わらん』

「ほうほう。……で、裏側は？」

『ファンタジー要素がフィーバーしているらしいぞ』

つまり、お楽しみ要素が一杯。だけど、同じくらい死亡フラグ満載ってか。

『まあ、表で生活すれば人並みの人生が歩める。裏に関わるかは汝の自由だ。』

それと先方の神からの要望でな、本来消える記憶は殆ど残したままの転生となる。オマケに我が輩から一つだけ加護授けることと成った』

こんな優遇措置なんて前例はないんだがなあ、とぼやいてた。

『加護と言うのはな、分かり易い例を上げるとネット小説のテンプレ的なチート能力だな。常識的に考えて人が手に出来ない力、それを授ける。』

おつと高望みはするなよ。我が輩はそんなに優しくないからな、自由に決めさせてなどやらん！』

「なっ何だと！？おおぼうだ！！」

『ふん、聞こえんな。』

汝は黙ってこの籤引きを引けばいいのだ』

何処からともなく取り出された四角い箱をズイツと差し出される。天井にぽっかりと穴を欠けた箱の中には神社で良く見るクジがどつさり並々と押し込められていた。

『これらのクジには我が輩と死神ちゃんが三日三晩徹夜しながら昼寝して選びに選んだチート能力が書かれている。今から汝がクジを一つ引き、そこに書かれた能力を与えてやろう。』

ちなみにクジを引く際には汝の運に我が輩の神パワーが上乘せされるから、余程の事がない限りハズレを引くことはあるまい』

ハズレが有るんかい！！

余程の事がない限り大丈夫とは言っても、自分でチョイスした物じゃないからスッゲー不安だ。何かイロモノ能力も多そうだし。

……つーか、オレが転生するのは確定事項なのか。

確かに未練はタラタラだし、やりたことも沢山あるから第二の人生が手に入るなら嬉しい限りだ。だがしかし……

ウンウン悩み唸っていると、業を煮やしたのか「男は度胸、さつさと引け！」つとはやし立てられ、自棄になりながら乱暴に腕を突っ込む。そして直感に任せて運命の一枚をドロー！！

『どれどれ、内容は……』

「強植装甲ガイバーのアプトム だと？」

『それも オメガブラスト まで進化済みか。かなりチートだな』
いや確かに強いよアレ。周りもチートだから目立たないけど、下手なチートよりチートだけど……ねえ？

毎回獣化する度に真っ裸になるってのはなんともいただけない。誰だって人前でストリップは嫌だろう？オレは嫌だ。

「もう一回だけ引かs」

『却下。チャレンジは一回切りだ。』

少しばかりサービスしてやるから潔く諦めよ』

取り付く島もなく切って捨てられた。

悟りに似た境地でうなだれる。

ああ、世の中はこんな筈じゃなかったことばかりだ。

『ほれほれ、ことは済んだしさつさと逝け』

と、アツちゃんがパンパンと手を叩くと。

ぱっかん。

足下の床が抜けた。

「NOOOOOOOO!!!」

咄嗟に腕を伸ばすが空を切り、オレは漫画の如く見事に穴へと落ちた。

『達者でなあ』

遠のく白の景色と、してやったりと壮絶な笑みを浮かべたアツち

やんの姿を最後に意識が途絶えた。

第零捕食へプロローグ（後書き）

「登場人物紹介」

・悪路王・

別名：大丈丸。桓武天皇の時代に反乱を起こした伝説の存在。

本来は中世の盗賊だったが、時代と共に人 魔人 鬼族へと変化した。

今作品では神々の諸事情で閻魔の職に就き、日々地獄の中間管理職者として働いている。

元が人間だった為、他の神と比べて話しやすい分類に入り、外見以外は非常に取っ付きやすい。

主人公が世界から弾かれる原因を作った元凶。

・死神ちゃん・

悪路王の秘書として働く地獄の住人。主人公をKILLした犯人学校で委員長とか生徒会長とかしてそんな無駄に厳しく生真面目な性格をしている。そのせいで周囲から壁を作られ、友達も数人しかいない。

現在彼氏募集中。

・主人公・

本作の主人公。名前はまだない。

平々凡々とした冴えない大学生で、日々をのんびんだらりんと過ごしていたが、神さまの諸事情により死亡。さらに世界より拒絶されてしまう。

しかし幸か不幸か、悪路王ことアツちゃんの温情+ によって”力”を得て転生する機会を得た。

彼が異世界に降り立つことで物語が始まる。

第壱捕食へ嘘か真か

拝啓 アプトムとなった君。

覚えているだろう、閻魔の悪路王ことアツちゃんだ。

この手紙を読んでいるということは無事に世界を渡れたようだな。早速だが本題に入ろうか。

面倒臭くてハシヨったところとかサービスについての説明だ。

最初に気が付いてると思うが汝は転生なんぞしてはいない。与えた能力がアレだったからな、その世界の既存の生物から誕生するのは無理だったのだ。そこで小型の「ウラヌスの遺跡宇宙船」を使用したトリップと呼ばれる世界移動を実行した。

まあ、血縁の家族が居ないのは寂しいだろうが、体は赤子・頭脳は大人な羞恥プレイを回避されてラッキー！とポジティブに受け入れてくれ。

それと容姿が生前と違うのは、汝が転生した場合に成る筈だった姿を参考に作成した肉体だからだ。死んだときの年齢まで成長させたいので馴染みやすさろつ。

で、汝が気にしていた獣化後の真つ裸状態だが、我が輩からのサービスで体内の老廃物などで衣服を作れるようにしといたぞ。老廃物とは言っても汝の細胞だからデザイン等も自在だし復元も容易だ。邪魔になったならば吸収すれば場所も取らんぞ。

次に現在地についてか。

その世界の概要は伝えたと思うが、大部分がこちらの世界に非常に似ている。そのことを踏まえた上で説明すると、まず時代は汝からすれば一万とんで五千年ほど前の大昔で、場所は太平洋上に浮かぶ孤島だ。

送った時代がそうだったのはダーツの結果に過ぎるので悪しからず。

ちなみに人間は住んでないから心置きなく能力のテストをすると

いい。

最後となるが、対価の説明だ。話忘れていたが、我が輩たち神
- 所謂高次元の存在は力が有る故に規則で縛られておる。理由は
我が輩たちの力は容易く世界のバランスを崩してしまうからだ。

故に直接的な干渉は出来ぬし、今回の転生や能力付与なども本来
は禁じられておる。

だが例外とは有るものでな、禁を破つてでも干渉しなければなら
ん時が稀にあるのだ。そこで、対価を支払って貰い帳尻を合わせて
おる。

汝の場合は「本来歩む未来」を対価として転生を受理し、「人間
としての生」と「生前の記憶の一部」を能力の対価として支払って
も貰ったから。

まあ、記憶の一部と言っても無くなって困るような内容じゃない
から気にするな。

以上で説明は終わりだ。後は自分で試行錯誤の手探りで頑張つて
くれたまえ。

では、良き人生を。

P・S・その1 勝手に転移に変更したお詫びに殆どの国の言葉
を話せるようしにといたぞ。あくまで喋れるだけだから文字の読み
書きは自分で習得してくれ。

P・S・その2 遺跡宇宙船だが、それは一回切りの使い捨てで
中身はスツカスカじゃ。基本再利用は出来ないので適当に捕食する
なりして処分してくれ。栄養価は高いから半年くらい食料として保
つだろう。

P・S・その3 例に漏れず、この手紙は読み終わると自動的に
消滅するぞ

危険を感じ手放した瞬間「ボンッ！」と音を立てて手紙が爆発した。

「うおわっち！お約束過ぎるなあオイ！！」

火の粉が当たった指先をさすりながら改めて周囲を見渡す。

視界に入るのは伸びに伸びた雑草のカーペットと異様なまでに大きな樹木の群。ときたま遠くで汚らしい奇妙な鳴き声が聞こえ酷く不気味だ。

一面緑に覆われたその場所は、誰がどう見ても疑いようもなく完全にジャングルの真っ直中である。

「無人島だっけか……。。都会暮らしの現代っ子にはキツッ
いなあ〜」

電気も無え、ガスも無え、水道も無え、文明の利器なんて何モンだ。無い無い尽くしの大自然で自給自足のサバイバル生活は正直言っつて無理があるぞ。

せめてキャンプ道具一式があれば楽なんだが。

「無い物ねだりしてもしょうがねえ」

それに予定通りアプトムの能力を得ているのなら裸一貫でも何とかなるだろう。

ナイフ・包丁の代わりに高周波ブレードを。火は超高熱線か生体ミサイルで確保可能だ。そもそも獣化兵は様々な環境下で活動出来るよう多様化されており、それを片っ端から取り込んだアプトムの肉體ならば深海でも溶岩の中でも宇宙空間ですら生存可能だろうし、野宿なんて余裕に違いない。

手紙に書いてあった事が事実ならばらくは食料も気にしなくて大丈夫だろう。

「だけど不安要素は拭えないな」

神と言っても万能ではないようだし。

そもそも前提である アプトム・オメガブラストの能力 がしっかり授けられているかも怪しい。多少の劣化ならば許容できるが全く使い物にならなかつたら目も当てられない。

と言うよりも、個人的に未だ夢ではないかと疑っている。

だってそうだろう？現実主義の現代っ子がフィクションとしか思えない事象を早々に受け入れる単純な思考回路を構成している訳がない。

さっきの爆ぜた手紙以外はどれもこれも冷静に考えれば「実はドツキリでした」と言えるようなものばかりだ。金銭面などを度外視すれば不可能ではない。

先の白い空間 - -彼の世なんか俺が眠る前に何らかの暗示を掛ければ、通常では騙されないことも脳は誤認するだろう。考えられる手軽な方法としては映像に一瞬メッセージを差し込むサブミナルメッセージかな。

そして適当な無人島に其れらしい物体（遺跡宇宙船）を作り、手紙を添えて俺を放り出せば今の状況が作り出せる。

例えば姿が変わっていても整形手術や特殊メイクなんて技術があるのだから別に不思議ではないのだ。

まあ屁理屈を並べてみたが、百聞は一見にしかず、嘘か真か見極めたいのならば獣化してみればいい。それだけで真実が分かるだろう。

.....それはそうと獣化ってどうやるんだ？

原作では皆簡単にやっていたが、何をトリガーにしているのかサッパリだ。基本敵キャラだからか単行本の設定資料室にも記載されてなかったし。

力めばいいのか念じればいいのか.....。うゝむ分からん。「とりあえず試すか」

初めは腕だけでいいだろう。いきなり全身を変化させたら脳味噌が付いていけないかもしれないからな。

右腕を軽く掲げ意識を集中する。イメージするのは比較的出番が多かった、四本の触手を有する白い巨躯 - -ガイバーの天敵であるエンザイム？。

記憶から掘り起こした空想の産物を己の腕へと投影し、明確な意

志を持って念ずる。

するとどうだろう。「グググツ」と音が聞こえてきそうな様子で筋肉が膨張し、一回り二回りと太く成って行く。爪は刃物のように鋭く尖り、掌は黒くそして固く変化、手首から肘に掛けて真っ白な体毛に覆われる。

「おお、上手くいっただな」

僅か数秒で全くの別物へと変化した腕に驚きつつ、成功した安堵感と奇妙な達成感を覚えた。先程まで疑っていたことなぞ忘却の彼方だ。

恥ずかしい話だが、今この時俺の心は童心に帰る所か退行していた。

好奇心に促されるまま何度も何度も獣化を繰り返し、自己調整機能による肉体的変化を飽き果てるまで楽しむ。

端から見れば成人近い男が幼子の如く嬉々として様は些か奇妙な光景だろうが。

指の数が減っても生まれた時からそうであったかの如く違和感を覚えなかったのは少々不思議だった。逆に触手など本来無い器官が形成された時も同様で、思うが俥に動かせることにビックリだ。

冷めぬ興奮は衰えることを知らず、気が付けば日はとつぷりと暮れていた。少々肌寒い微風と共に夜の帳が降り、清々しい清涼の空気を纏っていた大自然はその顔をガラリと変え、見る者を恐怖へと駆り立てる闇夜の衣を纏っているようであった。

流石にハシャギ疲れ、瞼が重くなる。

サーブスで付与された能力を応用して簡素な毛布をイメージすると、薄皮一枚がべろりと形や質感を整えながら剥がれ落ちる。真面目に楽で便利だなと思いつながら本能へ素直に従い糞虫っぽく出来立てホヤホヤのソレに包まると数分もしない内に眠りへと落ちた。

こうして俺の転生一日目は終わりを迎えたのである。

第壱捕食へ嘘か真か（後書き）

「用語解説」

・獣化兵・

ゾアノイドとは「調整」と呼ばれる遺伝子改造により用途に合わせた第二形態を獲得した人間の総称。簡単に言えば人工的な獣人のこと。

筋力増幅型や生体熱線砲型など様々な種類が存在し、その殆どが常人を遥かに超える肉体・能力を有する。

・ウラヌスの遺跡宇宙船・

ガイバー世界で太古の地球に舞い降りた異性人「ウラヌス」達の宇宙船。

驚いたことに宇宙船と言いながら一個の生命体である。

本作で登場したのは機能を最低限にサイズもコンパクトにしたレプリカ。

「今回の獣化兵」

・エンザイム？・

熊に蜘蛛の特徴を融合させたようなゾアノイド。

ガイバーの天敵として開発され、ガイバーの装甲を分解する分解酵素を有しており、爪と口、背より生えた四本の触手の先に分泌線を備えている。

登場当初は厄介な敵として活躍したが、後継機であるエンザイム？の登場により御鉢を奪われる形で表舞台より消えた。

第貳捕食へ新たな生活・一年経過

とある日の昼下がり。

鬱蒼と茂る樹海の片隅で二つの影が対峙した。

一つは六メートルはあるうドツシリとした巨体を有する蒼い熊。

世間一般に知られるものとは若干違い、腕には鋭い鉤爪の他に茨の如き棘を備えた籠手にも似た甲殻を身に付けている。面構えも非常に攻撃的で、どこか狩猟犬を思わせる逞しさがにじみ出ているように感じる。

それもそのはず、彼はこの森――いやこの島の閉じた生態系で独自の進化を遂げた種族であり、この日まで数多くの敵を蹴散らしてきた屈強の戦士なのだ。

好物である蜂蜜には目ががないものの、獣には似合わない思慮深さと経験を生かし切る知性を重ね備えており、同族の中でも恵まれた体躯と併せて巧みに利用して怪物じみた存在が闊歩する世界で長い年月テリトリーを守り通してきた。

その歴史は一介の熊達と比べるべくも無く、濃密かつ長い。

彼が此の場に居る理由は至極単純。愚かにもテリトリーに踏み入った侵入者を迎撃する為だ。

己が国を侵す者は何者であろうと許さない。

そう物語る瞳は鋭く明確な敵意を持つて不屈き者を睨み付ける。

もう一方の影はその眼光に怯むでもなく、ただ悠然と佇んでいた。丁度強い日差しと天蓋の如く空を覆う枝葉が生む暗がりには居るため、その姿はハッキリとしないが、ピンと伸びた背筋と二足歩行を目的として形成された肢体は紛れもなく人の型。しかしながら人ではないようで要所要所に僅かな違和感が伺える。

大凡であるが蒼熊と同じく独特な進化を成した猿の類であろう。

だとするならば、こ奴は相当肝が据わっている。

自然界では体の大きさは一種のステータスであり、例え張りば

一人前にテリトリーを持ったことで、無駄な戦いを回避したりする等の知的な行動を取れるようになったが、所詮単細胞。本質は変わらない。

相手の正体が不確かだったことと、積み重ねた経験そして直感が警告を発していたため威嚇に留まっていたが、流石に我慢の限界を越えた。

体格に見合わぬ敏捷さで一気に間合いを詰め飛び掛かる一連の動作は、端から見れば蒼い弾丸として瞳に映ることだろう。

対して侵入者はここに来て初めて動きを見せた。

迫り来る敵に臆することなく、逆に力強く大地を蹴りグンツと前に出る。

真正面からの迎撃。

これを第三者が見ていたならば口を揃えて言うだろう。「無謀」だと。

先程も述べたが二体の体格差は大きく、並べて比べれば今にも折れそうな枯れ枝を思わせる。普通に考えれば勝てる要素など一つも無い。

互いの距離が限りなく零に近づくにつれ、蒼熊の口角が笑みの形でつり上がる。

回避も防御も最早不可能であり、力も圧倒的にこちらが上だ。万が一にも負けることはない。

慢心による願望ではなく、必ず訪れる未来として己が勝利を確信した。

正にその瞬間 - - -

ヒュッ

鈍色の軌跡が煌めき、蒼の体軀に線が奔る。

一本だけではない。

小さくも鋭い風切り音を道連れに、一本、また一本とその数を増

やして行く。

一秒にも満たない刹那の交錯。

まるで道端で擦れ違ったかの気軽さで、何事もなかったみたいに立ち位置を入れ替えて着地した。

一見すると両者は共に全くの無傷。先の光景は夢幻の類だったのだろうか？

いや、違う。あれは現実で、その証拠に、ほら。

直線的な赤を滲ませ、膝はずりりと横に滑り、肩よりぼろりと腕が外れ、立派だった胸板が二つに割れて、首がごろりと転がり落ちる。

どんな得物をどう使えば可能なのか。

この主だった獣は玩具のようにバラバラに崩れ、標本じみた綺麗な断面を晒しながら、鉄の臭いが香る赤黒い池を産み落とす。呆気なく、そして現実味の欠けた死に様は趣味の悪い芸術作品にも感じられた。

血溜まりに溺れる頭は未だ理解できぬ様子で呆けた表情を浮かべ、偶然にも我が身を討ち滅ぼした敵の方へと向いていた。

光が失せ始めた瞳に映るは一つの異形。

白日の下に晒されたその姿は西洋甲冑に良く似た皮膚を持ち、両の腕には手の代わりに長さ50センチ程の刃を備えたる。闘うことだけを目的とした肉体は余りにも不自然であり、冷たい光を宿す二振りの凶器と相俟って、命を刈り取る死神を彷彿させた。

そして最後の最後、白い悪魔を脳裏へと焼き付けて一匹の戦士が息を引き取った。

相手が完全に死に絶えたことを確認し、詰めた息を吐きながら獣化を解く。

空気が抜ける風船のように張っていた筋肉が萎み、骨格も変わり

幾分か視界が下がる。刃として伸びていた指先はスルスルと短くなりながら五指を形成、硬化していた皮膚は柔らかさと色合いを取り戻し、一秒と掛からず人の姿へと変化する。

この世界に訪れて約一年。この感覚にも大分馴れた。

始めの頃は一タイムメージしなければならず、遅い・面倒くさい・ぎこちないの三拍子が揃っていたが、数ヶ月の訓練により今では呼吸するのと同じ位の手軽さで、瞬時に行うことが可能だ。頑張ったなあ俺。

適当に作った衣服を纏い、未だ朱い池を広げるバラ肉を見る。

細切れにされたソレは合わさっていないパズルピースの如く原型を留めてはいなかったが、奇妙なことに多くの部分が解体されたままの形を保っており、幾つかは微かではあったが脈動していた。

「やはり凄いな高周波ブレードは。切れ味が良過ぎて細胞がまだ生きています。」

流星は五人衆の能力・・・と言ったところか」

既にお気付きの方も居ると思うが、俺が先程獣化していたのは両腕に高周波ブレードを備えた超獣化兵・ザンクルスである。原作ではエリート中のエリート集団”超獣化兵五人衆”の一角を担っていた存在で、メンバーで唯一アプトムに捕食されず、ガイバー？に幹竹割にされた人だ。

本来であればマトリクスが無いので俺もアプトムと同じく外見の擬態しか出来ない筈だが、現実には普通に獣化出来た。まあ大体予想が付くが、コレもアツちゃんのサーヴィスの一つだろう。

取り敢えず、腹も空いてきたので飯にしようかね。

擬態機能を応用して手の結合力を緩め、某海賊王志願の技をイメージしながら、肉塊目掛けて腕を伸ばす。

勢い良く飛び出した腕は狙い通りに「べちゃり」とヒットし、スライムを思わせる姿で伸び広がり、すっぽりと包み込む。

「ではでは、いっただっきま〜す」

触れ合った部分の細胞の結合力を更に緩めて液状化し、餌の内部

へと侵入し浸透して行く。細胞壁に干渉にこちら溶け合わせて・・・
・・・一気に吸収する。

融合捕食。

その名の通り他の生物と融合することで捕食する、絵面的にエグいようなグロいような美しくない能力だ。

初めて使用した時はフィクションとリアルとの差が激しく、精神的にくるものがあったってゲーゲー吐いた。胃袋が空だったから胃液しか出なかったのを覚えている。

こちらも馴れてしまい、基本的に食事はこの能力で行うようになってしまった。なにせ調理する必要がなく、骨だろうと毒袋だろう気にせずいけるし、無機物以外ならば大概は食べれる上、全てを熱量に変換するのでエネルギー効率は高いし排泄物も出ない。

味を楽しむ事とビジュアル面に問題があるが、其れ以外は生物的に理想的な食事方法ではないだろうか。

一つ、また一つ、と吸収する度に痺れるような充足感と快感が全身を駆け巡る。

この蒼熊、見た目通り生命力が強いな。遺伝子情報はゴミ屑で使えないが食糧としては中々だ。

程なくして食事を終え、腕を引き戻す。

・・・・・・我ながら随分変わったものだ。

新たな肉体と能力に馴れたこともそうだが、文明の恩恵が期待できない現状を受け入れ、罨を用いずに狩りをし、厚真さえ何も感じることなく命を奪うなんぞ、前世だったら考えられない。

だがまあ、やればこつちが屍を晒すだけだし、何回か殺されれば肝が据わって度胸も付くんじゃないかな。俺だけが特別だと言うことはないだろう。

取り敢えず、そこらの恐竜じみた奴等を相手してみれ。彼奴ら獯猛だし容赦ないからね、兎とか相手にするより余程経験になる。

かく言う俺も五回は喰われた。内三回は頭から丸齧りでの即死である。

半ば不死である体の御陰で逆に内部から捕食してやったが、出来ればもう二度と味わいたくない体験だ。

さて、腹も膨れたことだし何しようかね？

島の外に行くのも一つの手だが……もう暫くは滞在しててもいいか。

己のことだが未だ完全に把握している訳でもないし、まだまだ未熟だ。もう数年は修行してからでも遅くはない。

そうと決まれば善は急げ、腹ごなしも兼ねて訓練に勤しむこととしよう。

第貳捕食へ新たな生活・一年経過（後書き）

「登場人物」

・蒼熊・

隔絶された島で独自の進化を遂げた熊。その中でも屈指の強さを
持つ歴戦の戦士である。

モンスターハンターの世界に生息する中型モンスター：アオアラ
シの平行存在で、こちらも種族名がアオアラシ。ハニーハンターの
異名は健在で蜂蜜を主食とばかりにバリバリベロベロ食べる。

ちなみにこの島の動物は下位クラスであるが、こいつは上位クラ
スの実力を有している。しかしながら高周波ブレードとは相性最悪
であっさりと殺られてしまった。アーメン。

「今回の獣化兵」

・ザンクルス・

最高の技術によって調整された獣化兵のエリート集団、超獣化兵
五人衆の一体であり、両腕に如何なる物質でも寸断する高周波ブレ
ードを備えた白い超獣化兵。

高い敏捷性と、高周波数で振動する微細な^{ひだ}襞で構成されたブレ
ードによる高速戦闘を得意とする。

見せ場らしい見せ場もないままガイバー？に最大にして唯一の武
器である両腕を斬り落とされ、脳天から真っ二つに割られてしまう。
五人衆最初の脱落者。

第參捕食へ旅立ちの日

馴れとは恐ろしいものだ。

不可能であったことも何度も繰り返せば可能へと至り、忌避していたことも徐々に受け入れ、至高の珍味も平凡へと貶め、心躍る未知が唾棄すべき既知へと成り代わる。

時間の経過と共に感動は薄れ、関心が削れ、想いが磨耗し、感情が死んで行く。

対象が変化したのではない、対象を観測した者の心が変わったのだ。

生ける者は常に刺激を求める。故にソレが得られなくなると、どれほど苦勞して手に入れた物であるうとゴミへと成り下がり、誰もが「飽きた」の一言で投げ捨てる。

とまあ、長々と講釈を垂れて何が言いたいかだが……
「暇だ」

全てがそう、この一言に集約される。

何を隠そう俺は現在進行形で暇を大絶賛持て余し中なのだ。

いやね、前回の宣言通り五年程は修行に明け暮れてはいたんだが、如何せん独学＋我流なもんで早々に行き詰まり、それでも気合いと根性で頑張ったものも数年で打ち止めに成ってしまった。

ならばと、この広大な島を実戦訓練も兼ねて余すことなく網羅しようとして歩き回った。だが、コレも十年ほどでアウト。成果は確実に出たが、元より戦闘狂でもないし殺戮も趣味じゃない。

だったら次は生前出来なかった事に挑戦しようとして、サンドアートを初めとし、ログハウス造り、手製の楽器で演奏など芸術関係などに没頭した。これが一番長く続いたが二十年もすると同じように飽きが来た。

この前も「シラー島に似ているから」と言う浅い理由で、俺が乗ってきた遺跡宇宙船の上に”眠りの神殿”を建設してみたのだが、

五年ほどを掛けつい先日完成してしまった。

正直言ってしまうことがない。

元々俺には大した理由や目的など無い。転生に賛成した理由も「生前出来なかったことをするため」だったからなのだが、それももうやり尽くしてしまった。

ゲームや漫画？二十世紀に来ていたのならば作家として活動してみたかもしれないが、もとより即物的で際限がないし時代的に論外だ。

「は、マジでどうすっかな？」

盛大に溜息を吐き出しながら足下の水面に視線を落とす。

今いる場所は何時水浴びに使っている浅いが広い池だ。ここからは確認出来ないが海と繋がっているらしく海水魚が結構な量で泳いでいる。極稀に人魚が現れるが水が合わないよう直ぐに上流へと帰って行く。

鏡面をゆらゆらと揺らす細波が収まると、そこには見慣れた人影が映り込む。

現代的な白のTシャツとGパンを身に纏った色白の肢体は線が細く、後ろできつく結ばれた董色の長髪と相俟って酷く中庸的だ。スツと通った鼻筋にぷっくりとした桜色の唇、そして水晶を埋め込んだようなエメラルドグリーンに輝く切れ長の瞳を備えた端整な相貌は嫌に整っており、作り物染みて人形のよう。

相も変わらず嫌み臭いぐらい小綺麗な姿にまたもや溜息が漏れる。大体察しは付いている事だろうが、これが今世の俺の姿である。

身長は低くなったがスタイルは悪くないし、前世と比べるべくもない美形と言う点では非常に喜ばしい。だが、誰にも男として見られない”男の娘”ボディってのは五十年間付き合っただけで来た今でも未だ納得が行かない。

やっぱりさ、男として生まれたからには”遅しい”とか”雄々しい”とか男性特有の魅力に引かれるし身に付けたくなるじゃないか。ん？外見と年数が合わないって？

ああ、そりゃそうだ。どうも俺は所謂”不老不死”って奴らしいぞ。

前提として、アプトムは腕一本からでも常識外れの細胞分裂により復活することが可能だ。これをまずは覚えていて貰いたい。

次に老化の原因ついて。大雑把に説明すると細胞分裂によりテロメアが短縮することで細胞が老化すると言われており、逆にテロメアの長さを保つことが出来れば細胞が不死かすると言われている。

以上のことを踏まえ考察すると、普通に考えればアプトムは復活する度に老いて行き、フルブラスト時には既に寿命を迎えている筈だ。だが、以前とまったく同じ姿で再生していることから、彼の細胞は不死化していると考えられ、そんな己の細胞に依存している存在でいる彼もまた不死であると推測される。

そしてアプトムと同じ体を持つ俺も同じく不死であるのだろう。

まあ、あくまでも推論であり確証はないが、実際に老化していないことから、あながち間違っではない筈だ。

おっと、大分話が逸れたな。

一気に話を戻すが、俺は超絶に暇なのである。

これをどうにか解決したいのだが……

「……そう言えば、元々外に出る為に訓練してたんじゃないかって？」

うつすらとしか覚えていなが、確かそうだった筈。いや、そうに違いない！

それに例え間違いだったとしても問題は無い。

なればこそ、早速だが旅に出よう。今すぐ行こう。さっさと行こう。

こんな飽き果てた場所に一分一秒たりとも居られるか！！

高ぶる想いに身を任せ、勢いのまま獣化する。

マトリクスに従い骨格が変化を始め、全身の筋肉が音を立てて盛り上がって行く。皮膚の密度が上がって固く硬化し「ビリビリィ」と

身に纏った服を内側より引き裂いた。

ああ、吸収するの忘れてた。まあ、幾らでも出せるからどうでも良いけどね。

肌を滑り落ちるボロ切れもそのままに獣化を続行。肩甲骨の一部が乖離し、そこから針金突き出るような感覚と共に一本づつ触手が伸びた。風もないのに髪が逆立ち、左右に分かれつつ、それぞれが同化し二本の頭角を形成。更に額と手首の辺りが腫れ物のように膨れ上がり、生体ビーム発生器官と生体ミサイル収納部が完成すると、変異が完了したことを知らせるように細胞の蠕動がピタリと停まった。

今は確認する術が無いが、俺の駆体は特撮ヒーローで登場するよくな黒い甲殻に覆われたクワガタムシ型の怪人っぽい姿 - トリニティプラストへと思い通り変化していることだろう。

バツと翅を展開し加減もウォーミングアップも無いまま初っ端からアクセル全開で宙へと躍り出る。

海を泳いで渡る方法もあるが、この島の周囲の海流は異様に複雑で常に荒れており、渦潮が出来ては消え出来ては消えを繰り返しているため無駄に体力を使う。そう言う理由もあって海よりも空の方が安全で楽に移動できるのだ。

慣れ親しんだ景色を一気に置き去り、期待を胸に外の世界を目指して宙を駆ける。

宛てなどないが、取り敢えず西でも目指そうかね。

あ、名前どうしよう。

対価で取られてそんまんまだわ。

第肆補食へ無計画な旅路・思わぬ発見

故郷であるシラー島（勝手に命名）を文字通り飛び出してから少しして。

海を越え、空を駆け、辿り着いたぞ新天地！

ああ、なんか感慨深いと言うか何と言うか・・・こうくるものがあるな。言葉にはしにくいだが、例えるならそう初めて上京した時に抱いた感情、または過去を振り返って其れまでが短くも長くもあつたと感じた瞬間の想いに似ている。

・・・まあ、五十年間引き籠もっていたから新しいモノに興味が引かれるのは仕方のないことかもしれない。

ぐるりと周囲を見渡せば緑の絨毯が地平線の果てまで続いており、柔らかな風が頬を撫で、さあつと流れて行く様はこちらを歓迎しているよう。いつもとは異なる空気に触れ、外に来たことを改めて実感した。

それはさておき、旅である。

意気揚々と出て来た訳だが、今は太古の紀元前。縄文もメソポタミアも遙か彼方の時代であり、死んだ婆ちゃんが住んでたド田舎よりも何もない。オブラートに包んで言えば、水清き緑豊かな大自然と銘打つのだが、ただそれだけなら見飽きているので面白味に欠ける。はてさて、どうしたものやら。

しかしながら、あつちは島でこっちは（たぶん）大陸。規模は勿論のこと気候も違うはずで、大いなる自然が生み出した神秘や絶景を求めて練り歩くのも楽しいのではないだろうか。

それに大陸横断。世界一周。うむ、なかなか胸躍る響きである。ついでに未だ原人で在らせられる嘗ての御先祖様たちの野性味溢るる営みを眺めるのもまた一興。

この先出会うであろう物事に想い馳せつつ歩き出す。元よりただの暇潰し、時間なんぞ有り余っている上に目的も無ければ宛も無い物見遊山。気の向くまま流れ流されゆらゆらと慌てず騒がず急がずに、のんびりゆっくり楽しみながら参ろうではないか。

犬も歩けば棒に当たるとは言うけれど、望んだ巡り合わせは早々に訪れないのが世の中の常である。

気の向くままにあっちへふらふら〜こっちにふらふら〜と散策しながら歩き続けること早三日。出発地点の草原は後方のずっと先に小さくなっており、周囲は細くも背の高い白木が視界を塞ぎ、足下には大小様々な石が転がってガタガタで険しい道へと姿を変えていた。

道草・寄り道をしまくったことで進行速度はだいぶ遅く、時間の割に距離は稼げていない。が、これまで問題らしい問題は一つも無かったことを鑑みるに比較的順調であると言えるだろう。

しかし、この場合の”順調”とは”何も無い”の同意義だ。

元より幸先の良いスタートなんぞ期待してはいなかったものの、予想を裏切る呆気なさは非常に味気なく落胆すら覚えてしまう。

「土地柄なのか知らんが随分とまあ大人しいものだ」

シラー島（もはや確定）では獣達が殺意と牙を剥き出しにしての呐喊を始め、食虫ならぬ食肉植物や衝撃で爆発する茸など自然のトラップの群による洗礼が日常だった。だから、こちらでもそれなりの歓迎があると考えていたのだが、結果は見事なまでの肩透かし。

楽なのは嬉しいものの平穩過ぎて逆に不安で落ち着かない。

「ん〜……まさかコレが普通なのか？」

蜘蛛の巣が張った脳髓から記憶をひっくり返してみれば、確かに前世では兵器並にデンジャラスな草木も無ければ野生動物との対面すら稀だった気がする。

『朱も交われれば』ってやつなんだろうが、殺伐とした生活に染まり切っていた己に驚くと共に呆れてしまった。まったく人間の適応能力の高さには感服させられるね。

獣どころか虫から一匹見当たらないことは流石に奇妙に思うものの、気を張っているのも馬鹿らしくなり苦笑と共に周囲への警戒を緩めた。

だって別にいいだろう？ どうやら此の場は死とは程遠い、平和と平穩が染み込んだぬるま湯なのだから。

とりあえず刺激が足りないので部分的に獣化し、視界を変えて世界を眺めてみることにした。

頭の中に分厚い図鑑をイメージし、その中から音波探查型のマトリクスを呼び出せば、その情報に従い視覚が閉ざされ、代わりに聴覚が強化されると暗闇の中に音の反射がレイアウトを引き像を結ぶ視界から色は失せてしまったが、眼で見ていた時より立体的かつ細部まで把握でき、なんとも言えない美しさがあつた。

続いて昆虫型をチョイスして眼球を複眼に変化させると可視光領域がズレ、光を取り戻すせば普段とは違う視界が周囲を取り巻いていた。あるものは色が幾つか失せ、あるものは逆に新たに模様が生き上がり、またあるものは一部がネガのように反転してしまっている。姿形は変わりないと言うのに色が違うだけで大分印象が変わったことに興味を引かれるも、如何せん観察対象の種類が少なく早々に飽きてしまう。

場所がマズかったな、と僅かに悔いながら次をセレクトし、蜻蛉型へと獣化する。視野が背後まで広がったかと思いきや、左右の端と端が繋がって視界の中央に空が、縁側に地面が位置するようになり、前後左右どころか上下まで分からなくなりグリーンと景色が回る

回る。一秒と経たず平衡感覚が狂いバランスを崩して倒れ込む。

「うげえ、気持ち悪い……………」

吐き気を堪えて速攻で獣化を解除し、そのままの体勢で不快感が過ぎ去るのをジツと待つ。なんかもう二日酔いみたいに揺れまくりですよ奥さん。

あゝチクシヨウ！もう蜻蛉目には成らんぞ、絶対！！

気を取り直して再度視覚をこころ切り替えて遊んでみるが、残念なことにそれほどストツクの量は多くない。これは獣化兵^{ソアノイド}が人^{ベイス}を素体に開発されたことからののか、一部の獣化兵^{ソアノイド}を除いて獣化しても物の見え方は人間形態と同じだからだ。

内容が五十歩百歩なハズレもあったことで数分も待たずしてネタが切れる。

うゝん、どうしようかなあ、次。拘らなければ蛇を模した温度感知や蜘蛛型の振動感知、犬を超える嗅覚など幾つか楽しめそうなものはあるが……………

ジワア

不意にそれは感じた。

余りにも薄く気のせいかとも思ってしまう位に小さい。しかし一度意識すれば気になると同じく、目に鼻に舌に耳に肌に五感の全てにこびり付く。

まるで眉間の数ミリ先に指を突き付けられたような、誰かに死角である背後へと立たれたような、滲みチリ付く肌のざわめきにも似た他者の気配。

相手の脈動をも聞こえるようなねっとりした生々しいこの触感、生ける者が発する息吹とも言つべき生命の波動だ。

「おやおや、これは待望の原住民遭遇フラグってやつかな？」

距離は大凡で2、300メートル先。数は複数で群を形成してい

ると想像される。反応の強さからして猿の類ではないだろうか。

喰らい呑み込み進化する戦闘生物としての嗅覚と本能が作り出した第六感シックスセンスが超人的に発達した感覚器官と連動して的確な情報を捉え脳髓へと囁く。

この先で待っているであろう出会いに思いを馳せながら、始めて感じる種類の生体波動を頼りに歩みを進めた。

「マジで便利な能力だわコレ」

生体波動の感知。

周囲に存在する生物の反応を把握し、位置のみならず種族個体の判別をも可能とするこの能力は高性能レーダーも真つ青な精度と高い利便性を有している。索敵範囲は現段階で半径500メートルと広く、一度補食した種族ならばリアルタイムで（大雑把であるもの）行動を把握出来る。例え相手が気配を消そうとも無意味であり、こちらの意識が無かろうとも働いてくれるので不意打ちが不意打ちにならない言う鬼畜仕様。

私生活でも戦闘でも随分と助けられ重宝している。

欠点として無生物と虫のような小さい存在は感知できないことが上げられるが、そんなのは些細な問題だ。気にするほどでもない。

「さてはて、こちらの動物はどんな奴らかねえ。」

あっちと同じでやんちゃ坊主か、それとも逆にひ弱なモヤシっ子シラト鳥か？

やっぱ生態とかも違うんだろうけど・・・あゝ楽しみだ」
時代的に進化の途中だから皆ヘンテコリンな姿をしているのだろう。それ等を想像するだけで滾る興奮が暴走しそうになる。

どうにも気が急いでるらしく、ゆっくりと歩いていた筈なのに何時の間にやら駆け足ほどの速度で地面を踏みしだいていた。

しばらく道成に進んでいると不意に周囲を覆っていた緑のヴェールが取り払われた。

辿り着いた場所は山荘にあるテラスみたいに外へと迫り出した崖の上。

捉えた生体波動は未だ先を指し示しているが、困ったことに前へと続く道は綺麗に途絶えていた。

おかしいなと目を凝らしながら辺りを見渡すと……ずい、と視界が伸びた。

「おっと、またやっちゃったぜ」

触れずとも分かる。今俺の眼球はギョロリと前へ飛び出し、角膜を残して瞼が包み込んだカメレオンに近い形へと無意識の内に獣化していた。

この形状は斥候獣化兵ソアノイドのロツシュだな。こいつは戦闘には適していないが双眼鏡の代わりになるのでちよくちよく利用させて貰っている。

と言うより、獣化兵ソアノイドの能力はどれも使い勝手が良い。だが、それ故にちよつとしたことで直ぐに頼ってしまいがちになり、半ば脊髄反射で獣化してしまう癖が付いてしまった。

今はまだ良いが後々のことを考えると矯正しとかないな。このままだと気付かずに人前で獣化しちまって「化け物」「悪魔」の烙印を押されて（いや、化け物なんですけどね）余り宜しくない未来に手招きされること必至だ。是非とも勘弁願いたい。

それとイエティや獣人伝説のモデルにされるのもNGだ。将来的に『ツチノコの正体は自分でした』なんてことになったら色んな意味で死にたくなる。

ともあれ、折角なのでピントを調整しながら改めて見渡すも、何処にも進めるような場所はなく、目的の猿？の群も発見できない。

おろっ？と首を傾げながら崖の縁より身を乗り出して下を覗き込めば……

「………うっそお」

-
-
-
-
其処には村があつた。

第肆補食へ無計画な旅路・思わぬ発見（後書き）

「用語解説」

・シラー島・

ガイバー世界で異性人「ウラヌス」が降り立った大西洋上に存在する島。

周囲を覆うサイコフィールドで隔絶された所で、基本的に上陸できず、人工衛星からですら発見することができない。

原作では太古の生物と人魚やフェアリーなどが古より変わることなく生活しているが、本作では奇想天外な生態系を構築しているデジャラスフィールドで怪物染みた獣やドラゴンなどが闊歩している。

「今回のゾアノイド」

・ヴィカルル・

蝙蝠のような風貌をした音波探査型のゾアノイド。

獣化時に眼球がなくなり、代わりにサーモセンサーが構築される。足の爪に麻痺性の毒腺、胸部に反響音探査用の超音波発生器官を有する。

・ラゼル・

昆虫型のゾアノイド。

哨戒・偵察を目的に開発され、敏捷性が高い。

・デボルド・

偵察と伝令を目的として開発された、巨大な蜻蛉の形をしたゾアノイド。

見せ場の一つもなく瞬殺された。雑魚要員。

・ロツシュ・

カメレオン型のゾアノイド。

斥候用として開発され、保護色の機能を備えた体と望遠機能がある目を有する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8443t/>

テンプレで戦闘生物に成っちゃった

2011年9月7日03時15分発行